

卷頭言

今年も又全国大会の時が来た。昨年より六月開催となった。第一の理由は昨年の岐阜大会の主眼が虫狩りにあった為であるが、八月は暑くて大変だから六月開催にしようとの意見が大勢を占めた為、以後六月開催と決めた。今年は千葉一宮町の一宮館で、六十一名の参加と六十六首の詠草をもって開催される。太陽の舟短歌会始まって以来最高の参加者と言う事になろう。

私は事あるごとに平成九年十二月一日発行の太陽の舟最終号を開く。ここには阿部先生の巻頭二十五首「安倍の館」「和歌文学発生史論政始末」「ナイル創刊へー太陽の舟の航跡」点描・太陽の舟短歌会小史」が十三ページに渡って掲載されている。平成九年十二月は先生のお亡くなりになる三年半前、私はこの中に最も先生の息遣いを感じるからだ。そしてその号の見開きの写真集に昭和五十六年八月二十三日、伊香保温泉夏季大会の写真がある。総勢十二名、台風の最中の大会であった。阿部先生、都野御夫妻、岸田君、石井君、吉田さん、前田さん、峯尾さんの八名は鬼籍に入られた。残ったのは、志賀さん、中村さん、原田君、私の四名。つくづく、私達は重い歴史を積み重ねて来たのだと実感する。

そんな太陽の舟の歴史を重く重く受け止めながら、古い会員も新しい会員も皆阿部先生の掲げられた、太陽の舟短歌会は平等な「同人誌的結社」であることを再確認しながら、意義のある全国大会にして行きたいと強く念願している。(高崎)

太陽の舟 目次

三十一巻 六月号 (通巻二九四号)

わが愛する歌 一名歌鑑賞

庄司 久恵

巻頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

杉山 直子

阿部正路論(第九十二回)

須藤 宏明

歌誌散見(第六十八回)

豊泉 豪

作品Ⅰ

森 五貴雄 他

四月批評(作品Ⅰ)

月田 藤枝

合 評(座談会)

森田 勝昭

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌拔芳(二九十二号)

森本 元昭・上田やい子

作品Ⅱ

高崎 邦彦

長歌特集

鈴木 熹子 他

全国大会詠草

奥田 清

文法講座(六)

三木 勝

作歌の目・作歌の技法(第五十三回)

松岡 三夫

歌帖余白(六十六)

山田(紀)・末次・松岡

歌会・支部報告 他

編集後記

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

山田(紀)・末次・松岡

阿部正路

阿部正路

阿部正冬

阿部正冬

阿部正冬

大磯の春夏秋冬

杉山直子

元旦の朝日に照らすカブト岩荒波乗りたるサーフィン娘眩し

藤村の終焉の地と云う大磯の細き墓標に白梅散りおり

ひば茸の平和条約門残し昭和の館末明の火事に

松林の吉田茂像指を示す遠きアメリカ袴姿で

ミネラルの不足を補ふ青バトは不思議と謎の海水を飲む

水平線交わる一点船が行く消るるまでの刻を忘れじ

湘南のビーチマラソン磯砂を舞い上げつつも富士に向かいつつ

波立ちて釣り人並ぶ湘南の磯をどこまで夫と歩けり

ブリ漁の港と栄えし大磯港昔を偲ぶ大漁旗の数

その愛の形を変えて世に伝とふ坂田山心中消えゆく純情

荒縄の張り巡らせてそう浪閣博文公の館の行方

黒人の子供を引きとりサンダースホーム沢田みきさん像駅前広場に

西行が訪ふて残せし歌碑のあり秋の夕暮れ静かに沈む

公園の紅葉ライトは空に消ゆ星数々の冬北斗みつ

いろいろな海の唄浮かぶ磯の宿クリスマスツリー海に写して

花降りて桜並木をぬけければ湘南平の眺望三百六十度

ピーナツの里とも云われる湘南の殻いる夫のこだわり談義

丸刈の大学駅伝選手達汗のにじみと筋肉の足

今はただ伊藤博文公の別邸は買主募る立札ゆるる

茶室よりもれる琴の音城山の若葉の樹々と滝音の中

早朝に「かわせみ」いるよと知らされて輝く羽色一日夢が

出港を待つ漁船の夫と妻大漁願ふここに不況も

裸木に冬を耐えぬき衣がえ樹々のささやき何か懂れて

夜明前妖精たちのメルヘンの光り踊れる一日の幕明け

ひたすらに天空に向かい夢を追いひととき燃ゆる懂れに向け

阿部正路論（第九十二回）

阿部正路論

須藤 宏明

―登場人物としての作者―

小説が小説たり得ているのは何故か。それは、登場人物が居るからである。それが評論とは最も違う点である。小説を読み解くということは、登場人物を検証していくことである。阿部正路が小説を論ずる時、最も重要視しているのは、登場人物の思想である。同時に、その登場人物を作り上げた、描き出した作者という存在の思想を探求することである。このことは、野上弥生子『秀吉と利休』に対する阿部の論考によく示されている。阿部は、利休に対して、次のように言う。

秀吉の魅力は、利休を切腹せしめたのち、急速に減退することによって、彼からなになんか奪い取ることができないことを。」利休の確悟の美事さの一つがここにある。敗北して利休は秀吉を超えたのだ。敗北したのは、むしろ秀吉であった。それが、芸術家に現世的に勝ち得た政治家の命運といふべきであろう。（『疎外者の文学』346頁 昭和四十六年・桜楓社）

阿部は、利休という人物の思想を論じ、利休を描ききった野上の思想を追求している。ここに示された敗北の美学は、阿部が、野上の文章から引き出した思想である。

これは、短歌の読解にも通じることである。一行詩という形式で完結している短歌にも、必ず登場人物が存在する。三十一文字の世界で、一つの物語が成立しているのである。たとえ、それが叙景歌であっても、景を見ている人物が、この物語世界に登場している。阿部が、一首の歌から作者の思想や生き方を論ずるのは、以上の理由に起因する。この場合の作者とは、何も現代の人間のみ対象にしているのではない。大伴家持の「うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころかなしも独りし思へば」の歌に対し、阿部は、

「こころかなしも」といった発想にも充分見てとることができるよう、彼は、こころの内部を見つめる人間であったのだ。（『疎外者の文学』70頁）

と言う。家持という歴史的人物に対して「彼は」と、実体的に捉えている。阿部にとって、家持も利休も野上弥生子も、そして、「太陽の舟」の歌人たちも同列に並んでいるのである。それは、すべて、物語世界での登場人物として存在を客体化し、そこに思想を読み取ろうという阿部の意志があるからである。歌の作者も、一旦、三十一文字の世界を作りあげ、発表したならば、その時から作者は登場人物になり、登場人物として読まれるという短歌構造、短歌理論を意識すべきであろう。作品を発表した以上、読まれる時には、すべての作者が家持と同列に並ぶということだ。このことは、阿部の『現代秀歌』に如実に示されている。

歌誌散見 第六十八回

豊泉 豪

「かぎろひ」①

「かぎろひ」は一九五四年八月、中山勝を中心に北海道旭川で創刊された歌誌である。中山は「アララギ」や村野次郎「香蘭」、大野誠夫「作風」などを経て、のち専ら「かぎろひ」に拠った。月刊誌としてスタートし、六八年から隔月刊となっている。六九年、十五周年を記念して定められた「かぎろひ」のしるべは「I 集団の紐帯を確認しよう。II 自由と創造の羽撃きをしよう。III 現実のなかの伝統をさぐり、未来を見つめよう。IV 無系譜ゆえの不羈を矜持しよう。V つねに自己及び集団の変革を意図しよう」というものである。IVの「不羈を矜持しよう」とするところに、恐らくは創刊者中山の強い思いが、また十五年を経ていはいえ、昭和二十九年という創刊時の空気が表れているように思う。全体として内容が抽象的なのは、こうした「言挙げ」の常でもあろうが、一見矛盾するとも思われるIとIVを、Vの精神によって両立させようということになるだろうか。八一年には編集発行人が中山から木村隆に移り、さらに〇三年には木村が退いて、現在は石山宗晏が発行人、西勝洋一が編集人として雑誌を牽引している。代表者の交代に際し

ては中山、木村ともに〈新陳代謝〉という表現を用いており、いずれも存命中の移行であることは特筆に価するだろう。近刊の〇九年三月号が通巻三九六号で、A5判三〇ページ、二四名の出詠者がそれぞれ九首から二〇首を発表している。エッセイや評論、研究も充実しており、現在松倉美知子「ことばと出逢う」（三三二回）、卯城えみこ「わが遠景・近景」（九回）、西勝洋一「現代短歌のプロムナード」（二五〇回）、石山宗晏「古歌逍遙」（四一回）、同「長歌」受容覚書（八回）の五編が連載されている。また「この一首」欄では鎌田章子、香月千代子、柊明日香の三人が、現代歌人の名歌秀歌を毎月各一首取りあげ鑑賞している。誌面できくに注目したのは前号評の欄である。特定個人の執筆ではなく、毎月十数人が集まって行なわれる合評会の抄録になっている。短歌のグループ・結社において歌会が重要であることは言うまでもなからうが、雑誌を発行している場合には、こうした合評会のような場が大切になるだろう。結社誌と言えども、より多数の目に触れさせる意図と形態をもって刊行物を発する以上、そこに作品を寄せる一人ひとり、外部読者に対する責任があり、常にこれをグループ内部で確かめ合うことが必要となる。十数人という合評会への参加者は、作品発表者に比して決して少なくない。旭川在住者が多いという利もあるが、やはりこの歌誌の姿勢、誠意をここにより取りたいと思う。近年出詠者、ページ数ともにやや減少傾向にあるのは否めないが、折々の特集を含めてさまざまな工夫がなされている誌面からは、十分に活気を感じることができ

四月批評（作品Ⅰ）

月田 藤枝

天皇に代はりて伊勢の大神に奉仕の憤ひ 頃七世紀

山田田鶴子

神域の世界を詠まれた二十五首詠に心洗われる思いに読ませて頂きました。万葉の世界とも日本の原点である伊勢の神域を格調高く読まれた力作に打たれ作者の心の高さも窺われて何回も読ませて頂きました圧巻と思います。

・矢島さん奏でしヨパン夜想曲静かに流る斎場に聴く

八代 陽子

かって太陽の舟同人の吉田操様の御葬儀は音楽葬でした。故人のお好きだった曲の流るる中で厳かに執り行われ哀しい想出が有ります。八代さんも歌友矢島様の御訣れの儀に同じ哀しみを抱かれたのですね、御冥福をお祈り致します。

・想い出すあのいろり端ときめきてトランプ遊び夜の更ける

まで

吉田 幸雄

今は亡き奥様との若き日の想出を時間も忘れてトランプに興じられたとしくしくに詠まれた七首、いつまでも想出は吉田さんの脳裡を占めておられる。亡き奥様お倅せ。：

・僕だつてママに抱っこがしたいんだしょっぱい涙がホッペ

に乾く

石塚 立子

尚ちゃんが生まれ、お兄ちゃんになった僕もまだ二歳、僕だつてママに抱っこがし度いんだ愛しい程良く解る歌、幼いお兄

ちゃんのじつところえががまんを作者は思わず抱きしめて頬ずり一ぱい一ぱい上げてたのね。

・磨くだけ磨いた様な夜空に明けの明星輝きつよし

江面 伸子

上の句が素晴らしい冬の夜空を良く表現されました。故に下の句が一層生きて一首のまとまりが印象深くなった。
・ワntenポ速い話にうなづいて言い度いことを話せずに聞く

熊谷 香織

未だ未だお若い熊谷さんの生き生きとした生活が見えます。お仲間も性格は多々、そんな中で人生を学問を論じ合っておられる、未来が光り輝いて見えます。期待しています。

・朧がらの中より独活の伸び立ちて鎌を入れれば水のしたたる

込山 千代

すがすがしい掘りたての独活が香ってくるような、此の頃八百屋さんに新鮮な独活が並ぶようになりました。独活は朧がらの中で育てると聞いていますが美味しそう：初夏の味わいとして、あの白さが魅力的です。

・うらうらと薄の穂波陽に輝ひ仙石原の秋にひたりつ

佐伯 朋子

箱根の仙石原の秋はなんと云ってもあの薄でしょう。雪山とおぼしき程に広大な真白さ、いつか私も歩いたことが有りました。薄の根方に秋をよぶ山草が小さな花を沢山咲かせていました。余りにも可憐で大自然の優しさが忘れられない想出のひとつとなっております。

四月批評（作品Ⅱ）

森田 勝昭

・東の間のショートステイでよみがえる今日は優しい私で居れそう
杉本 和子

長寿国日本、その背後には厳しい現実があります。そのお世話の厳しさです。近頃あちこちで介護の問題を聞くようになりました。その思いを敢えて歌で表現し自分を批判してまた頑張ろうという作者の人柄が出ている歌、と思いました。共感できます。

・「もーいいかい」母待ちわびし亡き父の「もーいいよ」迄十七年経る
武田 節子

あの世に行ってもまだ続いているであろうご両親のよき夫婦関係をユーモラスに表現され、感じのよい歌になりました。しかも根底には命のつながり、尊さを感じさせられます。読むほどに心にひびいてくる歌です。

・けふひと日もの言はずして暮るるなり夜の読経を一つ増やす
富永 道子

一人住まいが多くなった今日、その淋しさを表現した歌ですが、その淋しさだけで終らずに一人でもしっかりと読経という心の確かさを深める事で対応されている精神がよく出ています。読経の一つ増やす」がわかりにくいという人がいるかも知れないが、これはこれでよいと思う。

・在りし日の事など思ひアドレスに線を引きたり又一人逝く

長沼 温代

寒い時期はその厳しさ故に亡くなる人が多くなり、私の身の周りでも春を迎える前に何人かの人が鬼籍に入りました。まさにたった一本ですが線を引く事で過去帳に入ってしまった縁深き人を深く想われている様子が実感できる歌です。しみじみとした歌となっています。

・張り詰めし寒の空気を動かして鉢植糸の紅梅花の咲き初む
深谷 充代

「寒の空気を動かして」という表現がうまいと思いました。その張り詰めた真冬の寒さを暖めたのは紅い梅でした。やはり梅は「兄の花」ですね。春への胎動を見事に捉えて詠んでいます。

・またしても「誰でもよかった」善人が何故に死への旅となるのか

・とき変わり人ら変わりて憂うべき国となりしやきょう憂国
松本 昭子

現代は学問も進歩して無学の人は居なくなり善い事悪い事もよく分かっているはずなのに、日頃のニュースは見聞きに堪えない「これでもか!」という程の理不尽な世の中、どうなっちゃったんだろう、を松木さんはしっかりとぶちまけてくれました。思わず二首選んでしまいました。現代社会の批判、共感します。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は4月号から四首選んで行います。最初は三沢誠之助会員の

二人の子供にうちに来ないかと言ってくれうれしくあれど
気儘に生きてく ですか。いかがでしょうか。

Q 二人の子供が、うちに来て一緒に暮そうと云う。嬉しいが、気儘に生きていたいから、一人で暮すことにした一人暮らしの父の歌ですね。心温かな家族の像が浮かび、両者共に善良な人々で、作者は気持ちをや々と詠み、すがすがしい作品です。現在の世相も考えさせられます。

H 口語短歌としてみれば良いですけど、あまりにも破調なので推敲を要するな、と思う一首です。文語型にしてみると、「二人の子うちに来ぬかと言いくれぬうれしくあれど気儘に生きてく」となるのでは。上句は五、七、五にままとまると思いますけど、如何でしょうか。

W 「二人の子供」は「子供等」にすれば良いと思う。私は「気儘に生きてく」という精神を生かして欲しい。作者としても、一言言いたかったところだと思う。

B 「二人の子供に」の「に」がおかしい。「に」は「が」にしなければ。破調といってもここだけなんです。「生きてく」は「生きたい」にして、「二人の子がうちに来ないかと言ってくれうれしくあれど気儘に生きてく」ではどうでしょうか。

H 全部口語ですね。「生きてく」が文語だったからね。

B 「気儘に生きてく」って、いいね。うらやましい。

E では、次は浅見時子会員の

抗ひても苦しさ哀しさ迫り来る曖昧に生きやう怠惰と共に
です。如何でしょうか。

Q 作者の現在の心境をつきつめて詠った上句は、切実で哀しい。その答えが下句にあるようです。自分を深く見つめ、今の解決はこれより外にないのではないかと、読ませてもらったけど、早くこうゆう日常から抜け出て、現在より変りゆく歌をまた拝見したいと思う。

B この歌の良さは、上句と下句は同じことを言っているんだけど、全く別な表現をしているところで、切なさを自分なりに和らげようとしながら、出来ない自分を自覚している。読む人にとっては切ない歌だね。

H 哀しさとか苦しさとか惨めなことを短歌に詠み込んでいるんだけど、人生には「禍福はあざなえる縄のごとし」の諺のように、誰にだって運、不運がより合わさっているのだから、上句のほうは当り前だと思う。下句では作者は、自分にエールを送っているのではないかと、読みました。

W 言い過ぎていような気もするけど、この歌はこれで良いと思う。

B 対立軸を作りながら、逆説的に詠む短歌の作り方があって、これはこれで良い。上句と下句が逆説的でありながら上句が下句を、下句は上句を助けている。作者は怠惰でもな

いし、曖昧に生きようとは思っていない筈。

H この歌は上句と下句が反語的なんですね。

E 三首目は、木村重夫会員の

立春に土たがやして種を蒔く吾が庭前の小さき野仕事 に
移ります。如何でしょうか。

H 今年は去年と一変して、大不況でしょう。新聞やテレビでも、家庭菜園のことを云って、盛んでしょう。この歌の、「小さい庭先」でも農は疲れますよね。疲れるのを楽しんで、うまく詠んでいると感心しました。

Q 土を耕して種を蒔き、小さな野仕事をしていると、小さな幸せが湧いてくるのでしょうか。庭前(手の届くような所)に小さな幸せが積み重なって、生きる喜びになるのでしょうか。自然にふれて誰もが生きてゆきたい。私もこうありたいと思いますか・・・。

W とここで、「吾が」は要ると思いますか。

B 要らないね。「吾が」をとって、何の種を蒔くかを入れたほうがいい。

W 立春の時期に蒔く種だから、花かもしれない。種の名前をいれると具体的になる。

H そうね。何の種か知りたいわね。

Q 同感です。

B 花かもしれないし、野菜かもしれない。野良仕事と云ってないから花かもしれない。

H 「野仕事」って言葉は初めてですね。

W 「小さき野仕事」がとても良い。

E では、四首目の黒羽紘子会員の

あの人にこの人にもと近況を知らせたき今日絵手紙をかく
をとりあげます。どなたからでも。

Q 絵手紙を最近習い始めた方かなと思いましたね。そのことを含めた近況報告ではないかしら。明るい前向きな方のような感じがします。

W 最近、絵手紙は女性達の間にはやっているようだね。

B この歌で「今日」がどんな意味があるのかと思う。大体、誰だって近況を知らせるために手紙を書くのだから。「あの人にもこの人にも」は「友らに絵手紙をかく」で済むんです。H ちょっと、饒舌ですね。

B これは日記風です。「今日も」も「近況を知らせる」も実に曖昧です。作者の七首を読んでも、亡き夫を偲んでいる夫恋いの歌です。なんで絵手紙をかくのか、という心境を詠むといいのでは。例えば「近況を知らせたき」以下に「亡き夫の寂しさまぎらす絵手紙をかく」ぐらいでどうでしょう。E そうすればよく分かる。

W 「亡き夫」はいらないと思うけど。

B でも、「亡き夫」はいれなきや。

W 「夫の思い出絵手紙をかく」では。

H 絵手紙をかくことで、自分の寂しさを分解しているような感じがしますね。

E 今月は四首それぞれ異なる素材と詠みぶりの短歌をとりあげることができました、ありがとうございます。

(記録・山田紀子)

選者十首 (4月号より)

選者 岩橋千代子

椿笑む花にすっぽり頭埋め花粉まみれの目白出てきぬ

村田 孝子

こころ弱き日は妣の衣に帯を締め背筋正して風の中ゆく

山名 恒子

春近し梅一輪の日溜りに辺りの蕾競いうごめく

吉田 昌夫

弛みなき草木のいのち昨日今日⁺⁺(くさかんむり)の牙を

剥き立つ

川村 貴美

今日も又昨日に続く日々なれど老い付き来るは見えずに過

ごし

河野 静子

☆くちなしの葉を食む虫が葉の色に染まり肥りてゆくをたの

しむ

込山 千代

床の間に活けし水仙露もちて立居のたびに香りの動く

庄司 久恵

春の雨街を包みてやはらかし降りみ降らずみ早も日の暮れ

武田 節子

ばんと張る冬碧空に際立ちて切り絵のやうな榎木枝先

中村 陽子

天気予報当たりで仕事捗りぬ雨のち晴れの伸びし冬の日

長須 正文

選者 武田 節子

春一番吹きて雨戸を揺らしおり地球を覆う遠き海より

宮原喜美子

異常なる経済叫ぶ年明けも初釜の湯はしんしんと立つ

森田 勝昭

脆弱化させて通れぬ老の道受け入れられず八十の坂

吉岡悠紀子

あふれ出るものなければ安らぎは布に巻かれしミイラの

如し

生稲 進

☆蘇り夫よ顕ちませ底冷えの墓よりいでて共に帰らね

加藤かず子

旅に降る雨うら淋し夜の更けをとどろとどろと海鳴り響く

木村百合子

大鍋を囲む孫・子の声仕草亡き夫に似る亡き姑に似る

小林 絢子

音たてぬ白黒の鍵閉ざされて祖霊のごとくピアノは立てり

庄司 久恵

在りし日の事など想ひアドレスに線を引きたり又一人逝く

長沼 温代

霞浦かほの湖のはるかに淡きあかり見ゆ鳥も魚らも闇に眠るや

福地 啓子

選者十首 (4月号より)

選者 森本 元昭

「ただいま」と「お帰りなさい」の両方の言の葉紡ぐ家族

減りゆく 宮島マツエ

日曜毎老い母氣遣ふ末の子の電話いつしか心待ちする

山田 玲子

晩酌後独り炬燵で開く本虚構の中へ孤独の我も

岡部千代松

☆蘇り夫よ頭ちませ底冷えの墓よりいでて共に帰らね

加藤かず子

派遣切り家なく職なく寒中に放り出すとは心も凍る

河野 静子

失言のオンパレードの宰相に人生観の粗雑さ見え透く

佐田 孝義

夫逝きて時は流れて十五年我が身褒めたき今日までの日々

富原 澄枝

道元を空海に変へけろりとすわが宗教の脆弱なるや

松岡 三夫

たれかしるささらぎの末のつゆしげく想ひもぬるるかの面

影を 伊藤 英一

幾万の人に守られ生きて来し吾の大切な一人ぞ伊藤さん

高崎 邦彦

選者 上田やい子

風吹けば風の行く道指し示す赤のまんまの赤をゆらして

三木 勝

立春の夜明けの海を海苔取りのエンジン響かせ小舟行き交

宮島マツエ

う 古りていく躰より抜かれし血液を若きナースと共に見てゐ

山田 紀子

る 空いまし哭きだしさうな黒き雲思いを遣す夫が墓の上

加藤かず子

亜麻色に筑紫野枯れて甘木線の一両電車風とはしれり

末次 房江

に 分校の鐘の音澄みてわたりゆきし息白く畑をかける童ら

玉川 愛子

米二俵背負ひし腰も自らの身体一つを支へて居れず

鶴来けい子

けふひと日もの言わずして暮るるなり夜の読経を一つ増や

富永 道子

さむ たんぽぽの綿毛をしきりに吹く幼本のページの綿毛は飛ば

ず 深谷 充代

☆くちなしの葉を食む虫が葉の色に染まり肥りてゆくをたの

しむ 込山 千代

天皇に代はりて伊勢の大神に奉仕の憤ひ 頃七世紀

山田田鶴子

「齋王物語」巻頭二十五首は、作者の故郷伊勢神宮の齋王に関する古事を詠んだもの。齋王に対する解説があればこの二十五首の鑑賞はより深まるであろうと思われるので、少々齋王について述

べる。齋王は天皇に代わって伊勢神宮に仕える為、天皇の代替りごとに未婚の内親王又は女王の中から卜定ひらきまという占の儀式によって選ばれる。最初の齋王は天武天皇の娘、大伯皇女、弟は大津の皇子。以後六百六十年、六十余人の齋王の名が残されている。齋王になると宮中の初齋院に入り、翌年の秋、都の郊外野宮（のみや）に入り、翌年九月都を旅立つ。その前大極殿で発遣の儀式に臨み、天皇は齋王の額髪に小さな櫛を挿し「都の方にはおもむきたもうな」と告げる。いわゆる「別れのお櫛」である。その後輿に乗り、群行（ぐんこう）と呼ばれる五百人を越える従者を伴う壮麗な旅に出る。五泊六日の旅であったと言う。鈴鹿峠は伊勢の国、思いは断たれるのである。大伯と大津の物語、伊勢物語六十九段は男と恬子内親王のはかない恋物語、そして何も事跡を残さぬ六十余名の皇女にも悲しい物語があったに違いない。拔芳歌七世紀の頃とは、大伯皇女が齋王となつた六七〇年頃。作者は六百六十年六十余名の齋王

の人生に思いを致し、その深い学識の中で見事に二十五首詠「齋王物語」を成した。秀歌拔芳をお読みになった会員の皆様にもう一度この「齋王物語」を読んでみてほしいと切に希望する。

枯れてゐし草丈の指す天心を仰ぎて吾れは生きむと思ふ

三木 勝

枯れた草は余分な物を全て剥ぎ落し、丈夫な茎だけが屹立して天を指す。それはまるで荒野にあって天心を指す生命の意志を感じさせる。どれ程年を経ても、生命の終焉を迎えようとしても、そのぎりぎりまで己を燃焼し尽くそうとする作者の信念、あるいは執念が凝縮した一首と言えよう。作者が追い求め続けているものは何であるのか。まだ確とは見えて来ないが、この「信仰告白」の中に浮かび上がって来るのであろう。

床を背に妻とデジカメ撮り合いて今年の出発初釜の午後

森田 勝昭

「初釜」とは新年最初に行なうお茶会で、お濃茶、お薄茶、そしてお懐石料理を召し上がって新年をお祝いするお茶会の事。特定の人だけを招いて行なわれる茶事のように畏まるものではなく、わきあいあいと楽しめる花のある茶会だと言う。私は茶道は分からない。が、着飾って床の間を背景に写真を撮り合う夫婦の華やいだ雰囲気伝わって来る。そしてこれが作者と奥様の共通の一

前々号 (292号) 秀歌抜芳

年の出発。うらやましいかぎりだ。
山沿ひの線路に敷ける枯葉巻き乗客まばらなディーゼ
ルが行く
遠藤 剛

「如月の光景」と題する七首、最寒の光と陰が
繊細に描かれて、退職三年の作者の来し方が伝
わって来る。抜芳歌、線路に枯葉が落ち敷かれて
いる状態を思うと、頻繁に列車の走らない線路。
乗客もまばら。それでも列車は山に沿って走って
行く。道路の枯葉を巻きながら疾駆する車を詠ん
だ歌は多いが列車が線路上の枯葉を巻き上げなが
ら走る姿を詠んだ歌は新鮮だ。車より尚冷たい無
機質な世界を描いて成功した。

暖かき今年の冬も寒に入り雪は積りて安堵して居る

緒方 善丸

人間の心とはおもしろい。決して雪が好きなの
でも雪が待遠しい訳でもない。唯地球温暖化が心
配なのだ。だから雪が積ると「よかった、寒いじゃ
ないか、やはり冬が来たじゃないか」と妙に安心
する。しかし実は温暖化は確実に進行していて降
雪量の少なくなっている事も知っている。それで
も安心がほしい。個人の力ではどうにもならない
地球規模の現象なのに。あるいは人類の滅亡の一
歩なのかもしれない。

猪の檻を垣間見疼きけり人が開発せし丘に住み

君塚 一雄

ほんの少し前、私の家の側を真黒な猪が猛ス
ピードで駆け抜けた。罾に掛かって泣きながら引
きづられて行く猪を何頭も見た。作者もそのよう
な罾に掛かって檻に入れられた猪を見た。それも
垣間見た。それだけで心が痛む。本来自分が住ん
でいることは彼等が先住民なのだ。猿も猪も皆住
民に害をなす。長く住んでいると、彼等を敵視す
る自分に気付く。抜芳歌、そんな身勝手な人間へ
の警鐘。深く心に沁みた。

短歌読み花と向き合ひまだ誰も起きない時を独りじめ
する

込山 千代

最近朝の目覚めが早くなった。少し前まではそ
れでも又すぐに眠る事が出来た。しかし最近は何
覚めるとなかなか眠れない。これも老化の一現象
化と気を重くしていたが、そうか抜芳歌のように、
誰も起きない一時を独りじめすれば良いんだと妙
な感動を得た。作者は短歌を読み、又詠んでもい
よう。そして薄明かりの中で花を愛でる。さて私
は何をしようか。

欧風の街路灯町になじみきて冬の夜更けを閑かに照ら
す
佐伯 朋子

街の風景には歴史がある。どんな物も最初は新
しい。しかし、時と共にその物によって作られる
風景は周囲と馴染んで行く。それが歴史だ。作者
の住む街の街路灯は欧風である。最初は奇異に見

え、周囲から浮き上っていたに違いない。しかし、歐風の街路灯に似合う店や建物も出来、いつの間にか見慣れた風景になり、落着いた居場所を得る。だから冬の寒さの中でも、その明かりは暖かくやさしく、そして閑やかなのだ。

のんびりとモヤシのひげ根を摘む半時指の冷たさ春遠からず
鈴木 薫子

冬の日中、のんびりとモヤシのひげ根を摘む。どれ程の量か分からないが、三十分も掛けて摘む。その行為そのものが何か牧歌的だ。しかしこの歌の良さは、そんな牧歌的な世界ではない。そのひげを摘む指の冷たさの中に春に近い事を実感している事なのだ。どこか真冬の冷たさと違うものを作者は感じている。その感性の鋭さに、そして言葉にする心の豊かさに感動する。

友の名をおくやみ欄に見しあした胸の巣箱に空洞一つ
杉山 榮子

おくやみ欄と言うのだから、新聞であろうか。ちょうど八年前阿部先生の死亡記事が新聞に掲載された時の会員諸氏の驚きと嘆きの気持ちを思い浮かべながら、胸を痛くしてこの歌を読んだ。朝の新聞に友の死亡記事を見つけた。その時の悲しみを「胸の巣箱の空洞」と表現した。真人は心の中に沢山の巣箱を持って日々の命を満たしているのだと実感した。その空洞に又新しい命を宿し

てほしいと切に願う。

池泉めぐる水は豊かに鉄師の天衝く槓に寂寂と雪
多和玲子

「鉄師」とは出雲地方のたたら製鉄に従事する人々の事を言う。古代より斐伊川流域で製鉄は盛んであって、江戸時代その鉄師頭取は巨万の富を築いた。鉄師の庭とは、その頭取の櫻井家か絲原家を指す。共に松平不昧公に気に入られ、特に絲原家の庭は出雲流と言われ不昧公ゆかりの庭である。槓は円錐形の見事な形をなす。そんな美しい庭園に寂寂と雪が降る。見事な描写力だ。最近の多和さんの出雲の歌は深く深く心に沁みる。

「もーいはい」母待ち侘びし亡き父の「もーいはい」迄十七年経る
武田 節子

悲しみを暖かいユーモアに変えて母の死を見事に詠み切った。十七年も父は母を待ち侘びた。きつと母も早く父の元へ行きたかったに違いない。しかし人はそう簡単には死ねない。それで良いのだ。私はこの十七年をちつとも長いとは思わない。子供達にとって母との十七年は何物にも変え難い年月であつたらう。船乗りを父に持つ私には拔芳歌のような父と母の睦み合いは絶対に詠めない。作者の幸せをうらやましく思う。

ふるさとの山は穩しくて優しく小春日和の義姉の葬送
照山 好子

前々号 (292号) 秀歌抜芳

二句三句の助詞「は」と「て」の使い方が巧みだ。作者の義姉をいとおしむ気持が特に「て」の重なりの中から滲み出て来る。たとえば「山穩しくて優しかり」ではこの暖かさが出て来ない。歌は時には調子をはずしても思いを伝える言葉のリズムがある事を抜芳歌は教えてくれる。心から溢れ出る自然な言葉こそ歌の原点なのだと改めて教えられた。

近く見る富士は朝餉に窓辺よりコーヒーの中に映りていたり
永野 昌子

大磯支部の歌会に出席する為に土方さん宅に向かう途中に見る富士は本当に大きくてきれいだった。それぞれの地方に自慢出来る美しい風景はあろうが、富士の美しさは格別だと思ったものだ。抜芳歌、家から近くに見える雄大な富士。その富士山が、小さなコーヒーカップのそのコーヒーの中に映っていたと言う。この発見が歌の命であり、力であり、だからこそ朝餉の満ち足りた気持ちが多分に伝わって来る。

我が干支の巡り来たりてこの年をゆったり進まむ己が流れに
長沼 温代

今年の干支は己丑(つちのとうし)。単にうし年と呼んでいる。私の干支は丁亥(ひのとい)。もう五回回って元に戻ってしまった。いわゆる還暦だ。作者は何回目の干支だろうか。何となく年

男、年女と言われれば今年こそはと、心に期すのは人の常。今年の初詣では殊更に新鮮であったろう。結句の「己が流れに」が自在で人としての豊かさを感じさせる。

春遠き庭に見つけしふきの臺夕餉の話はふたつで足りぬ
原武 寿子

私が鴨川に引越して来た翌年の春、義父から山盛りのふきの臺をもらって天麩羅にして食べた。あの感動は今も忘れられない。作者は自分の家の庭で見つけた二つのふきの臺。まだ春には遠いのもうふきの臺よと、春を待つ二つの心が、夕餉の席でふきの臺をはさんで春よりも暖かかった。結句の「ふたつで足りぬ」が何とも美しい響きをかもし出して心地良い。

掌のなかのコーヒーカップに温みあり妻と語らふ墓のことなど
松岡 三夫

「下総を終の住処と決めし日に近くの墓地の折込チラシ」私達の世代はいわゆる漂泊の世代。地方から出て来て「一家を成し、しかし入るべき終の住処を持たない。まして故郷に帰るあたはずなのだ。だからこそ老いて墓の話題は欠かせない。そんなある意味大切でありながら心重い話題をコーヒーを飲みながら妻と語らう作者のやさしく暖かく重厚な人格をコーヒーカップの温みで表現し切って見事だ。

長歌特集

白馬岳に夏

石塚 立子

雪溪に夏陽のあたりきらきらと虹色放つ雪の面うすく落けける白馬の大雪溪に一瞬を霧はたちこめ灰色の冷氣の中にアイゼンの鋭き爪を装着す柔く食ひ込むアイゼンに雪の感触捉へるは久かたぶりの夏山の心浮き立つ思ひのみ雪の斜面を一系列に連なり登る登山者の一人となりて歩を進む霧の晴れ間を沢くだる雪消の水の音高くキヌガサソウの眩しさは空に透き消え急斜面登る雪溪時折をどこかに岩の崩るるが響き聞こゆる戦きを心に抑へ頂きめざす

反歌

頂に霧湧きあがりブロッケンの中に見る己は手をふる

旧友と旅へ

奥田 清

草枕旅に出でむとあかねさす照る駅頭にたかさごの待つ友二人とさねかつら逢ひをよろこびむらぎもの心ひらきてたまきはる命全きをうべなひて車窓流るるつがのきのつぎつぎの景見もやらずビールとつまみ乾杯と声あはせ飲むたたみこも隔つ年月朝霧の消ゆなつかし甦へる学生時代のそのままの声と

貌なりうつせみの世を経しものものを八十に近き齡たまくしげ箱に封じてひたぶるに酔ひにまかせて語らひてゆく

反歌

ゆきゆきて寂しくならば語らはむ息つぎあひし学生の目を

おもかげはるか

北川 昭

旅にして蝦夷の地戻る女に会い構えぬままに打ち解けて親しみ覚え和むれば寝もやらずして語り得て心浮き立つ一日なり心残してもどりに断ち切れずして文交わし遼遠なれど限りなき愛育むの意を固む逢瀬の時は難けれど成就し難き愛求めいかにあらむか自にただす「修学旅行の付添に上京す」との文来たり旅館の奥に生徒らの賑わいのなか臆せず常の如くに振る舞きてにこやかにして語り合う二人で過すまたの日に前にも増せる優しさに落ち着きませて真向かえり我の想いを伝えしにこれより先はお互いの心信じて交際に努力なさむと言いくれし望みかないし霜月に常の逢瀬はかなわねど心開きて応い合い和める裡に時の過ぐ自由時間の殆どを我との対話に振り向けて「明日は来てね」と言ひし女母を伴い見送れり送り来たれる数枚の写真新たな表情を見せて何を語りきや睦月半ばに唐突な文の来たりて魂消えて思いも寄らぬ儂さにも空にこの身擲ちぬ女の母御の初めより交際するを否として抗い切れず挫けしか文の使りも今はなく心の荒び癒されず遠空に向け「結婚は生活なるか」と呟きて自に言い合せ領けり雲居はるかをおもい染めはつかに女を知る無常水無月むかえ

終なりし手短かなれる文添えてすずらの鉢送り来たれり

反歌

なにげなきとしつきなるときのまにわすれゆがたきひとのおもかげ

離れども杜の都の女娶る蝦夷のひととの轍踏まずして

青春の夢

酒向一次

甦る紅燃えし若き日が『海のロマンス』に魅せられて英雄しき太刀は峰に雪朝日に映ゆる越の国日本海の荒雄波海を知らない山の子が立ちし渚は奈呉の浦芭蕉ゆかりの有磯の寄せでは反す白波は晴れの入学祝い酒海龍湖畔際やかに光る薨の学びの舎久遠の理想身に秘めて希望に燃ゆる健男児八幡の杜の神かけて国利民富計るべく知徳を磨き技を練り雄飛の翼鍛へなむ使命は重し予備練は四面海なる我が祖国外侮りを撃ち払い父母護らん健男児赤道直下の湯の海も冰山揺らぐ北溟も正しき舵に平和あり節理の前に勝利あり如何なる賢船快艇も人の力に依りてこそその精鋭を保ちつつ強敵風波に当たり得る七洋の海乗り越えて逆巻く波と闘いて世界に充つる船魂を鍛へに鍛へ海軍と商船士官夢にみた戦い終んで船はなく紅の血潮は燃え尽きてあはれ青春夢は泡

反歌

沖の船 舳も去りてウインチの響きとだへて灯ともる

海に生きし友を妬むにあらざれど我が血は未だ潮香におどる海坊主八十路を迎え今日からは陸沈すると皆に知らせる

全生園(一)

玉川 愛子

明治末の人里離れし森奥に強制終生隔離舎はつましき家として建ちし駅よりの道荷車にのり里人の目をさけし治らざる病血縁も汚れしとされ村八分離縁さべつのかぎり受けしハンセン病者の苦難あり治療のかくりつ無き時代病苦は一生さいなみし偏見の世にひそむため父母より賜びし名を秘しぬ社会とへだてし椋の高き垣根に白き花今も咲きつぐ希望なき病に生きたし天折の歌人らの詩碑あまたあり命の叫びの歌は流離ふ

反歌

戦時下の飢餓にたへかね病む身もて拓きし畑地いまは荒れはつ「いのちの初夜」北條民雄が崩れゆく病のさなか書きし小屋跡

三恵の大櫨(山梨県若草町)

月田 藤枝

千年の生きの緒にして櫨大樹支柱あまたに支へられ季くればまた若萌えのみどりしたたる香ぐはしさその昔に有りし落雷に割かれしあとの枯渴していまに残れる痛ましき大洞あり木の元の太き根方を手をつなぎめぐりをかこむに二十人めくるめく大樹の来し方をただに畏れてみつめをり甲府盆地にいまを生くいく代かけて人々は大樹護りきほろほるとやさしく匂へよ桃のはな菜のはな野のはな幾重にもはなびらかざしやはらかに天然記念物のほまれに生くる老樹かこみて

反歌

桃のはなもやふ盆地に一〇〇〇年の尊き若葉に小鳥があそぶいまの世をみつむる老樹に言葉あらば何と言ひけむ問ひても

みたし

老いの恋

松岡 三夫

わが胸にきみの入りきて忽ちにわれを蠱惑し惑わせりそはふるさとに帰えりし春なりわれすでに七十路なれどこの想ひいまだ知らざるなり このわれをとらえ離さず胸を焼き焦がしつづけて摩訶不思議なるこれが恋といふものなるや少年のころこれに似し淡きもの芽生えしことのあるを思い起こせど恋とは遠き感情なりきいま老いて心をとらふこのおびえこのわななきよまさしく恋にあらざるやわれ知らねどもきみの手ににぎりおのくはまさしく恋なれきみと腕を組み多々羅岬の夕闇をゆるりと歩むふるへは恋なるぞ恋なるぞ恋の秘葉われ知らざる世界のものなるやそは老いの恋おぞき心の告白なるぞまさと言ふがよき言ふがよき

反歌

老いて恋カタカナのごと角張りてさくららの闇に口吻をせりわが生は残りをかぞふ日々なれどきみを恋して生きて燃えたし

信仰告白第五章(十二)

三木 勝

皺に沿ひあかぎれ走る日を賜ひ春風受けて夏の風晩夏の候の蝉しぐれ秋風受けてたたずめ月のめぐりて仰ぎ見る枯れ葦分けて泳ぎゐる初冬の留鳥とどめなく行く当てなくも水の面深まる冬にたたずみてひとり祈りゐる方丈の家

反歌

冬の枝一枝残さず地にうつす眠れる村の天心の月

(第5章了)

宮古島へ

渡辺 幸子

冬晴れの富士の上飛び沖繩の離島に着けば柔らかき二月の日射しデイゴの花ブルーゲンベリアにハイビスカスマさに南国とりどりに早や三月には海開き潜り泳ぎて浜遊び若者家族で賑わうとう岬に立てば眼前の太平洋は蒼さまさまグラデーションに目を見張る 島人のいう穏かな海のみならず嵐、あらしの通り道島ごと吹き飛ぶ心地せり荒波洗う珊瑚礁岩のオブジェを作り出す離れ小島と橋結ぶ一・五キロのドライブは海の上波の上走ること来間島には一面のさとうきび畑広がりぬ南国故の三期作高く育ちしさとうきび刈り入れ作業の島人の動けど見えさとうきび畑

反歌

さとうきび噛んでしゃぶりし遠き日あり戯れに食めば硬く吐き出す

夜の海の潮の香りも運びくる「安里屋ユンタ」耳に心地よく



第十一回 太陽の舟 全国大会 詠草

- 1 都市税に化けたり定額給付金さもしく待つも口座通過す
2 今はまだ用なき乳房抱きつつ湯舟にて思ふ女のひと世
3 川音となぐさめられつ会話せり山深き故他人は聞かず
4 おまえと今登りたいなあ分かつているかなわぬ事とでも願う切に
5 桜逝きもみじの若葉いきいきと長生きせんと老いに微笑む
6 吾が怪我の全癒を祈り亡母断ちし「田螺ははの和えもの」いまわ今際に食まむ
7 今われに不足あらねどしのびくるこの孤独感しずもる部屋に
8 溪谷の川一ぱいに花筏せきで崩れてふたたび組みり
9 桜の木（イチハラトラノオ）科学園に毎年訪ひぬ今年も会へり
10 花片の散りつくしたる老梅に瑪瑙メノウ色せし実の息づけり
11 今日という日は昨日亡くなりし人が生きたいと思ふひと日でありし
12 皺しわとさざ波立てる瘦せし手に取る受話器よりダイエツト勧誘
13 一生を働くのみで逝きし母いつかより添ふ吾を待ち給へ
14 最終のランナーのごと力こめ詠みつづけんよ辿り着くまで
15 春先の蓬を祖母と摘みし野原今は出入りを阻みし藪に
16 待ち侘びし染井吉野は早にすぎ牡丹桜の賑う小道
17 外灯の鉄柱たたきピタパタと括られしネクタイの反乱
18 がん治療越えて余命に花浴びて瘤持ち洞ある幹に手を置く
19 根の先を何処に延ばし保ちある崖に傾く万朶のさくら
20 生者より死者満ちみつるぬくもりにゴールデンウィーク来ませはらから
21 君の臥すホスピスの大き窓にみる藍の夜明の果てなく深し
22 「おくりびと」映おくらればこの人生に涙と笑ひ吾れを重ねし
23 黄斑に穴のあきたる目を持ちてゆがみたるもの並べていとほし
24 春告ぐるかぞふるほどの梅にきてつがひの目白花こぼしゆく

6月28・29日於：外房一宮館

- 25 笑顔あふれ四十六年振りの再会にあれやこれやの席順論争
26 鶯のなく声ひびく道すがら竹落葉踏む亡夫の靴音
27 朝の陽に大堀川にたれて咲く雪柳の花妣の手まねく
28 可愛さに預かりし男の子卒園を迎へて安堵今日の晴れの日
29 誰ひとり通ることなき野良の道シルバー体操へペダル踏み行く
30 終日を人と車で混雑のハローワークに花水木咲く
31 八重桜舞い散る丘の屋下がり介護のグループ皆笑顔なり
32 茹でたてのグリーンアスパラこりこりと若さ顯ちくる老いの朝餉に
33 こだはりのちがふ二人が共に居て四十年も連れ添ふ人間の不思議さ
34 暮れがたき夏至の浜辺の寄す波に丸ごとさらす素足の心
35 主亡き更地と成りぬ家居跡遅しく咲く水仙一株
36 馬酔木とふ古風な花を愛せしか盛りて我等の道に照り映ゆ
37 繁りたる庭木切られて陽が注ぐ老夫婦は今何処に暮らす
38 庭濼を浮きて回れる花びらの今を奏でるまぼろしの時間
39 「アベ・マリア」を弾く外人の足元に積まれしCD足とめて買ふ
40 在りありて一つ息衝き虹をみるあまたな人に彩られけり
41 故郷のオリンピッククのジャンプ台一直線に翔ぶ夢をみる
42 デイゴ咲く公園化したひめゆりの塔前にして人々ポーズ
43 法堂の卍勾欄ぬらす雨二十三棟伽藍包む
44 口先で動かせぬものに出くわせる二歳児はまず泣いてみせたり
45 若き日の単衣ほどきて吾の孫にチャンチャンコ仕立て子なき友より
46 産声の元気に聞こえ嬉しさに不安は消えて涙あふれる
47 寝入り端おぞしき夢に苛まれ侘寝の夜の明けを待ちわぶ
48 雛と武者 人形供養に送り出す身辺軽くと心を決めて

第十一回太陽の舟全国大会詠草

- 49 桜^{はな}ちりて碧空ひろし師の庭の鶯の初音^{はつね}しばし聞き入る
50 水張田のほとりに茱萸の実熟れてるし亡母と田植^{はつなつ}ゑし杳^{はつなつ}き初夏
51 ご近所は老寡婦のみの家多く頼りにされる吾も八十路に
52 永平寺偉大なる道元禪師の道ありてしだれの櫻芝櫻の野路
53 公園の桜のトンネルくぐりつつスキップ踏み七十路間近か
54 逝きてなほ兄は笑みふる吾が胸に兄弟不孝咎めもせずに
55 裸電球ともして妣が紬織る箴の音聴く真夜を覚めぬて
56 一両のディーゼル着ける午後三時姫女苑群れる無人の駅に
57 迷ひつつまだ捨てられぬラブレター君とのかかはり過去とはならず
58 家並ぬい夜の風吹く冷えきった記憶消しゆく足裏の影
59 息を呑みねずみと向き合う没入の魔法の瞬間まばたきで消ゆ
60 腰痛の浅きねむりにかすかなり南無大悲観世音のご詠歌ながる
61 施設の夫見舞ひての帰り天頂の降る半月の光かたじけなくて
62 波踊る風紋残し砂浜は夕日落ちゆく海にこぼれて
63 鬱金ざくら父の命日共どもにそっと抱へて四月は往きぬ
64 三日月より兎墜つると泣きしなど二歳のわれよ病む姉の文
65 児を抱きて身じろぎもせぬ物乞いに心動けども横目に過ぎる
66 花なくば実のならざりしこの世なり花を咲かさむ吾れ老ゆるとも
67 廃船と出漁準備の舟の群れわれと孫らの構図のごとし

七首選歌してお持ちください。当日参加の方、投稿のみの方は、前もって支部長さんにお出し下さい。

六月二十八日(日) 十一時三十分 外房線大網駅前集合 一宮館宿泊

文語で短歌を詠む人のために (六)

奥田 清

(3) ラ行変格活用 (ラ変)

口語でラ行五段に活用する動詞「ある」は、文語では、「頂の稜線深くカールあり 氷河期のまま岩乾きゐる」のように、「あり」であって、次のように活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
有り	有	ら	り	り	る	れ	れ

四段活用を基本に考えると、終止形は、ウ段で終るのが普通であるが、ラ変の場合は、「有り」と、イ段で終わっている。そこがつまり、変格の活用なのである。

ラ変の動詞は、「あり」「居り」「はべり」「いまそかり」の四語のみだから記憶しておくこと。

(4) カ行変格活用 (カ変)

口語のカ行変格活用の動詞「来る」は、文語では、「十一時が日向を寒くつくる頃あまた墓標を兵ら運びく」(宮柵二)のように。「来」であって、次のように活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
来	○	こ	き	く	くる	くれ	こよ

カ変の動詞は「来」一語だけである。命令形は、「よ」を伴うのが普通だが、古くは「こ」のみでも用いられた。

(5) サ行変格活用 (サ変)

口語のサ行変格活用の動詞「する」は、文語では、「氷点に達す 沼面を研ぐ風の波紋のままに蘆凍りゆく」のように、「す」であって、次のように活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	○	せ	し	す	する	すれ	せよ

サ変の動詞は「す」の一語だけであるが、例歌のように他の語について複合動詞となり数多くある。

- (1) 罪す 旅す 心す あるじす ものす
- (2) 全うす 悉うす 空しうす 明らかにす もっぱらにす
- (3) 重んず 甘んず 安んず 先んず そらんず
- (4) 訳す 愛す 解す 略す 熟す
- (5) 達す 決す 欲す 失す 発す
- (6) 生ず 通ず 命ず 論ず 感ず
- (7) 成功す 散歩す 対面す 読経す

(6) 下一段活用

口語でラ行五段に活用する動詞「蹴る」は、文語では、次のように活用する。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
蹴る	○	け	け	ける	ける	けれ	けよ

カ行の下一段「け」に、「る」「れ」「よ」のついた活用なので、下一段活用という。下一段活用の動詞は「蹴る」の一語だけである。

作歌の目・作歌の技法(第五十三回)

哲学をする短歌(五)

三木 勝

発展とは前にあったものの機能を踏まえて、次の形が生まれてくることである。この場合、次の形・形態は、前のものが持つ機能と目的を内包している。それゆえに発展と呼ばれるのである。

例えば、自動車は馬車の発展形態である。馬が車を引き、その台車が荷物を運ぶ。馬の機能を内燃機関が果たし、トラックの荷台が、荷物を運ぶ。この場合発展は、スピードと大量に運べる事が可能になったことにある。しかも飼料や牧草などの環境的条件からも開放され、燃料を手にすることが出来る限りにおいて、大都会の中も砂漠の地も自由に移動できるようにになった。また馬が伝達使を乗せて、情報を伝えていた機能は、馬に変わって電気が使われ、電報となり、電話となり、インターネットとなって、量とスピードにおいてその機能を発展させてきた。

さて日本における文芸においては、長歌から短歌、短歌から連歌、連歌から俳句と次々に新しい形態が生まれてきた。このことは、日本の文芸が、長歌から短歌、短歌から連歌、連歌から俳句へと、前例のような意味において発展してきたといえるであろうか。それは否である。ではどのような意味において否であるのかを考察してみよう。

長歌は、見たもの・感じたものを叙し、叙するという叙事的行為を通して叙する者の思いを焦点の定まった抒情へと昇華させていくことにある。その叙するという行為を出来るだけ切り詰めて、抒情性の表出にその重きを置こうとしたものが短歌である。長歌では、その前半部では叙事を述べ、基歌(もとうた)の最後の部分および反歌において情を述べる。この基歌の最後の部分や反歌から短歌は派生してきた。つまり短歌は、長歌の持つ機能のすべてを吸収して、別の形態になったのではなく、長歌の一部・部分が分離して、出来たものである。

連歌には、短連歌と鎖連歌がある。短連歌は短歌を上句と下句とに分け、五七五の上の句をAが読めば、下の句の七七を相方のBが上の句に応えて歌うというものである。鎖連歌は、これをABCDE・・と三者以上で歌いつなげていく。歌と心を鎖のように繋げていくので鎖連歌と呼ばれる。繋げていく時、短歌は五七五と七七の部分に分解される。連歌において、短歌は二つの部分に分解され、二つの部分となることにより、二人以上で共同で読むことが可能となる。連歌は、一人のひとが自分の抒情を歌う短歌の機能を進化させ、抒情を歌う目的を達成しやすく変化・発展したものではない。短歌の持つ五七五七七という構造を利用して、短歌を二つの部分に分けた。二つに分けることによって一首の歌を二者で分かち合えるようにした。一を二にすることによって、共有・分有が可能となった。この共有・分有によって、繋げるといふことが可能となり、連歌は、遊戯性・即興性・共同性を持つ

つこととなった。連歌において、「気持ちを通い合わせ」(注2) 情感をひとつのものとして共有することが可能になった。

ひとつの短歌を二つにすることによって、人の心をひとつにすることを可能とした。短歌における感情の交流は一個の人間ともう一個の人間、つまりそれぞれに独立した人間の独立した情感を相聞歌や贈答歌によって交流する方法である。連歌においては、個的な情感は消え、個を越えて、集団における情感の共有・分有が形成されるのである。この事において連歌は、短歌の持つ目的・機能を十全に継承し、発展させたものとはいえない。連歌は短歌を部分に分解し延長・拡大することによって、短歌の持つ感情交流の機能を、個と個の感情交流から集団における感情融合へと変化させた。

俳句は、連歌の発句より派生してきた。連歌における発句は次のような特性を持つ。「他の句と違って発句には前句がない。付合の対象がないのである。したがって、句は一句で独立した世界を持つことが必要になるが、同時に、前述の如く当座の風景を詠みこむこと、また、その連歌の目的にふさわしいこともとめられる。」(注3)

付合のための前句がない発句は、自ずから独立性を持つ。連歌が滑らかに展開するために、舞台設定・環境的条件の共有化が必要となる。このために、作者の心境・抒情ではなく、連歌参加者が共に認識できる舞台設定、環境的条件を「今||ここ」に即して発句を読むのである。発句には必ず次の読み手がいる。このことは連歌を読むことは共同作業であることを意味する。共同作業は、相手がいることを必然とする。相

手がいれば共同の目的がある。発句にはその共同への配慮が自ずと含まれている。江戸時代、発句は俳句の形を取りつても発句は、発句であり続けた。いつでも次の読み手、付合をする者が現れても、それが可能となる条件で読まれていた。

しかし明治期になって、正岡子規によって、発句は明確に俳句と規定され、一人で読み、付合を意識しなくてもよいものとなった。俳句は、このようにして発句の持つ独立性と舞台設定、環境的条件を「今・ここ」に即して読むという部分を継承して姿を現してきた。連歌のもつ即興性と共同性は稀釈され、連歌ほどの即興性と共同性は求められないことなく、個の作業となっていた。

以上のように日本の文芸は前のもののある部分・目的を採り、その他の部分・目的を捨てることによって変化してきている。つまり構造化を持つ発展ではないのである。部分から部分への変化あるいは移動である。この流れの中で長歌・短歌・連歌・俳句を見るとき、それぞれの目的と機能が見えてくる。太陽の舟短歌会は、この流れの中で短歌の目的を集団として自覚することによって、短歌を歌い続けられる永続的集団となることが出来るであろう。(注1) 久保田淳・島内裕子『中世の日本文学 作家と作品』放送大学教育振興会 一九九五年 一六頁。(注2) 同上。(注3) 同一二二頁。訂正3月号三八頁で『近來風体抄』の著者は二条為世と記したが、著者は二条良基であった。

歌帖余白（六十六） — 編集雜記 —

松岡三夫

市川市の真間山弘法寺の境内に俳人富安風生の
まさをなる空よりしだれざくらかな

という句碑が建っています。風生の句集『松籟』所収のよく知られた名句です。その枝垂桜というのは句碑のすぐそばにある樹齡四百年の「伏姫桜」のことです。いわずと知れた滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の伏姫に因むものですが、その由来は詳らかではない。

滝沢馬琴は明和四年（一七六四年）六月九日、江戸深川の旗本・松平鍋五郎の屋敷の用人滝沢興義の三男として生れます。本名は瀧澤興邦。当時の筆名は曲亭馬琴。現在は多くの本や教科書に滝沢馬琴と書かれています。これは明治以降に使われるようになった表記で、現在確認できる限り、本人は瀧澤馬琴という筆名は使っていない。

彼が使った筆名曲亭馬琴は、読み方を変えると「くるわでまこと」（廓で誠）、つまり遊郭で真面目に遊女に尽くしてしまふ野暮な男という意味。愉快な筆名です。

馬琴は、九歳のとき父がなくなり、その翌年長兄から家督を譲りうけ松平家に仕えるが、十五歳のとき松平家を出て放蕩生活。二十四歳のとき山東京伝の弟子となり、戯作者として出発します。『椿説弓張月』のような読本のほかに一層通俗的な黄表紙や合巻などの草双紙も多く書きます。『南総里

見八犬伝』の執筆には、文化十一年（一八一四）から天保十三年（一八四二）の二十八年を費やす。最後のところを書いていた頃には老年と多忙な作家生活のために目が見えなくなっており、息子宗伯の妻土岐村路（お路）に口述筆記してもらう。このことに嫉妬した妻お百が、なにかとお路を苛めたと伝えられています。

『南総里見八犬伝』は、室町時代後期を舞台に、安房の国里見家の伏姫と神犬八房の因縁によって結ばれた八人の若者（八犬士）を主人公とする長編怪奇小説であることは、よく知られています。

『八犬伝』に強く影響を与えたのは『水滸伝』です。『水滸伝』では、百八つの魔星が飛び散り、後に英雄豪傑として各地に現れますが、『八犬伝』では、八つの数珠玉が飛び散り、八犬士として世に現れるのです。『水滸伝』の英傑たちの物語を換骨奪胎したものが『八犬伝』です。忠臣・孝子・貞婦の行いは報いられ、佞臣・姦夫・毒婦は罰せられるという儒教道徳に基づいた勧善懲悪の物語。明治になり坪内逍遙が『小説真髓』で、八犬士を「仁義、八行の化物にして、決して人間とは言ひ難い」と断じ、近代が乗り越えるべき、旧時代の戯作文学の代表、と斬って捨てています。なるほどそうでしょうが、むしろ馬琴の「換骨奪胎」による物語りの大きさと怪奇をいうべきかもしれない。

《本歌取りとは、古歌の基層から響いてくるものと新しい着想から作り出されるものとの交響を求める試みである。》

— 中西進『短歌の本Ⅲ』（「短歌の技法」） —

歌会報告

本部4月例会(第351回)

(深谷幸記)

日時 4月11日(土) 13時～16時30分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 28名 出詠 31首

司会 生稲 進

桜も満開で五月の気温と言われる暖かい日でした。会場いっぱい参加者で歌会が始まりました。洗足池畔吟行会の歌、桜の歌等春の喜びを感じました。高崎代表の批評の中で「感動をあまりストレートに歌わない方がよい」と言われたのが印象に残りました。世話役の山名さんのお陰で毎月和やかな歌会が続いていることに感謝しています。

今月の高得点歌

・「だんだん」の声わたりあふ故里の棚田に蝌蚪の生まるる頃か
多久和玲子

・春を呼ぶ水張田日に日に増えゆきて今宵月満ち田毎耀ぶ
高崎 邦彦

・泣き声がかすか寝息にかはる時小さな君の夜空が回る
石塚 立子

・泣き声がかすか寝息にかはる時小さな君の夜空が回る
(北川記)

日時 4月11日(土) 10時～12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 中村 陽子

出席 8名 出詠 8首

春の盛りを迎え冬眠中の佐伯さんが歌会参加を再開され、一段と引縮まった歌会でした。支部詠草の推敲で中村さんの「淡彩にふっくら山の嵩増して花と新芽の湧き立つ息吹き」は見事に春を迎えた情景を詠った快作として話題となり、初句の「淡彩」について「けぶるがに」などの日本特有の色合いの表現が色々あり、検討の余地があるのではとの意見もありましたが、欠かすことの出来ない二句を考慮すると形容詞が連続するため、原作のままで落ち着きました。

今月は丸山さんと北川さんの七首詠について鑑賞し、連作の七首をどう詠いどう構成するかについて話題となりました。

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 4月12日(日) 13時～16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 7名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

水戸は桜が満開、車窓から見える千波湖の水と共にキラキラ光っていた。

先生のミニ講義は、「鑑賞より実作へ」(短歌現代3月号)。

歌会は活発になされた。言葉、素材、情景、表現それぞれきちんと詠おうと言うことを確認した。次は情景がよい例。

・屈まりて新聞読みるる耳許に不意にとび込む初音ふた声

岩橋千代子

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 4月15日(水) 10時〜12時

場所 岩間公民館

出席 6名 出詠 10首

司会 深谷 充代

ぼたん桜の美しい頃、つつじも咲きだした岩間での歌会は格別です。次の例は、やさしさと又、社会への批判と。

・娘に送る野菜を包む新聞紙明るきニュースの紙面選びぬ

原武 寿子

柏支部 支部長/末次 房江 (多久和記)

日時 4月17日(金) 12時〜15時

場所 アミューゼ柏

出席 8名 出詠 18首

昨日の暑さに比べて今日は。16と一転肌寒さを覚える一日でした。この会場の入口では定額給付金の申請書の説明会にもなっていました。悪天候のためか人手は少ないようでした。

まず支部長から連絡事項の説明があり歌会をはじめ、活発に意見の交換をしました。終わったあと雨が降り出しました。

・しきり散る桜花花びら共に浴び二人の会話しばし途切る

塚本 正子

・柏より越後奥州北大地転動重ねて五十年の婚

角田 順子 (宮島記)

大田支部 支部長/庄司 久恵

日時 4月27日(月) 13時〜16時30分

場所 大森山王高齢者センター

司会 宮島マツエ

出席 9名 出詠 11首

三木先生のご指導で、一步深まる緊張感のあふれた勉強会でした。お能の達人長島さんが、見学にお出でになり次の二首を出詠されました。能の研究者の作品は、やはり風格があります。

・松が枝のひまよるもるる月影の花もにてしばし休まん

・夕陽にうの声悲し鳥江野辺秋風なくや虞美人草

長島 宏

掲示板

平成21年4月29日(水) 午後1時〜4時30分

品川区民短歌大会(春季)が開かれました。会場の荏原文化センターへは70名近い会員が集まり有意義なひと時を過ごしました。

講師は三枝昂之氏(リトム主宰)と、高崎邦彦氏(『太陽の舟』代表)でした。

・ひと日ひと日つなぎ来てこの日金剛婚初うぐひすをささげえと聞く 川村 貴美

高崎代表の選の第一番になられた歌で、月田藤枝・須澤漢子 同人の歌も入賞されました。又互選で三位となった、湯本いと会員も入賞の栄に輝きました。

(久保田記)

お詫びと訂正 (五月号)

39頁下段3行目 群れ↓群生